千刈狸の泣き

先日、氾濫後の子吉川の支流付近を通った時に、その爪痕の酷さに驚いた。昔の面影はもう無い川辺の様子を見ていたら、幼い頃の遊び場だった近所の河川敷の事を思い出した。

子吉川の本流で河口付近に近いその河川敷は、結構な広さがあり、子供心をくすぐる多種多様な物、流木や壊れた日用品、人形や小舟の部品などが数えきれないほど散乱していて、近所の仲間達と、何して遊ぼうかと相談するのが楽しかった。

川は広く深く流れが速いので、絶対に中に入ってはいけないという鉄則があったため、川遊びに興じる「川ガキ」のような遊びはしなくても、いくらかでも遊んでいられた。

そんな河川敷で、とあるおばあさんが、土手寄りの平な所で畑作をしていた。騒がしい私達を追い払うどころか優しく声をかけてくれて、おやつをくれたり、畑作の手伝いまでさせてくれた。手入れが行き届いた畑の野菜の畝の間に、きれいな花が沢山植えてあった。

「河川敷は、川のおかげで、栄養が良い土なので皆良く育つんだよ。仏様にあげる花は、これで足りるんだよ。」

アスター、グラジオラス、都忘れ、菊、鶏頭など、花の名前を季節が変わるごとに教えてくれた。

ある日の事、まもなく大雨になるかもしれないと、おばあさんは、収穫できる野菜は収穫し、それ以外は、つかえ棒をさして固定していた。

「この土手の向こうにある畑に、苺がなっているから、採って食べていいよ、今日は、それでお終いだよ。」

それを聞いて私達は、嬉しさ一杯、その畑に駆けて行き、苺を採って頬張っていた時に、見知らぬおばあさんが来て、

「こら！泥棒するんじゃないよ！畑の物も人の物、勝手に採ったら、泥棒だよ。どこの家の子供だね？今から家の人に言いつけに行くからね！」凄い剣幕で叱るのだった。「おばあちゃんが、いって言ったから…」というのもちろんとした言葉にな

～ 思い出の河川敷 ～

月影の狸

らず、ただ大きな声で泣くだけだった。「泣いてだめだよ、悪い事は悪いんだ！」さらに私達の泣き声は大きくなった。そこへ、さっきのおばあさんが来た。事情を知ると、

「雨でだめになってしまうので、食べて貰おうと思って言ったんだよ。さあ、もう泣かなくていい、今日はこれでさよなら。」

私達は、心底ほっとして、それぞれ家に戻った。

次の日は、ずっと大雨と酷い風が吹き続けた。子吉川の支流が氾濫し、子吉川も水位がかなり上がっているので近づかないように大人達から何度も言われた。

そして次の日、友達と河川敷に行って見みると、何もかも跡形もなく流されていて、上流から流されてきた木や草が散乱していた。どこがおばあさんの畑だったのか見当もつかなくなっていた。

その後、そのおばあさんと会うことはなかった。河川の工事が始まり、立ち入り禁止の札があちこちにたっただけで、私達は、もうそこで遊ぶこともなく時間が過ぎた。護岸工事が終わり、散歩やドッグランができるスペースがあるくらいの河川敷公園が出来て、畑はなくなり、畑作をする人の姿もなくなった。

今でも、おばあさんの笑顔と、おばあさんの育てていた花達と、仲間と畑で食べた酸っぱい苺は、忘れられない思い出である。